

## 災害に負けない国づくり・地域づくり・社会づくり

### 一 絵画・地図が伝えるもの・語るもの・見えるもの

私たちの回りには、人々の生命財産や社会経済活動に重大な影響を与える「6つの危機(地学的、気象学的、疫学的、事故的、事後的、経済的)」があると言われています。前者の3つは主に自然現象を素因とした危機であり、たとえば、1755年のリスボン地震や江戸幕府末期(安政時代)の多発災害は、国家の存亡凋落の端緒となって歴史を変える大きな出来事になっています。2011年の東日本大震災も100年後、200年後に振りかえってみれば、時代の変曲点として語り継がれているかもしれません。

近代以降、殊にこの数十年の間に情報通信技術が飛躍的に発展し、災害の状況や内容が、リアルタイム画像・記録ビデオ動画・航空機などの空中写真として、放送通信・インターネット・SNSなど、多種多様な媒体で伝えら、私たちは記憶にとどめることができるようになりました。一方、近世以前は、口承による伝承、文字・文章による古書・文献、あるいは絵画、地図や地形図、鳥瞰図などの記録として、直接に五感に触れながら災害情報が伝えられてきています。

今般、「都市と美術」というテーマをいただき、災害絵画や都市の変貌を描画した地図を通じて、人々が災害をどのように受け止め、何を後世の人々に伝えたかったのか、教訓として語りかけたことは何か、それが未来にどう繋がっているのかを、私自身の災害対応の経験や教訓をもとにして、災害に対する自然観・世界観・人生観を探ってみることにしました。そして、国土・地域・社会の視点で、将来、どのような社会システムを築いていくことが大切なのかを考える一助となりますと幸いです。

#### 越智 繁雄 (おち しげお)



(一財)河川情報センター 業務執行理事 (元国土地理院長)

1958年山口県生まれ。83年九州大学大学院修士課程修了。同年、建設省(現国土交通省)入省、水管理国土保全局水資源部長、関東地方整備局長、国土地理院長の後、現在に至る。2011年新燃岳噴火、東日本大震災の際には政府の防災担当として業務に従事。また、関東東北豪雨、熊本地震では、被災状況把握などで応急対策活動を支援。著書に「激甚化する水害—地球温暖化の脅威に挑む—」(共著、日経BP社、2018)「歴史の謎はインフラで解ける」(共著、産経新聞出版)。